

# 病院・高齢者施設の環境づくり

歴史ある病院に学ぶ これからの病院環境とは

## 1.はじめに

コロナ禍を経て病院の風景が変わってきたように思います。以前は混雑した待合に長時間患者さんが待つ光景は当たり前でしたが、密な環境が避けられ、オンライン診療が可能となった昨今、混雑した病院に行かなくても済むようになった背景から、病院の在り方も変化を要する時代になったと感じます。

そんな中、全国から一日600人を超える患者さんを迎える医療法人神甲会 隈病院の増改築工事が行われました。病院建築で実績のある株式会社メドックスが設計を担当。インテリアデザインを弊社が担当させて頂き、このたび完成しました。本病院は7月に行われた国際モダンホスピタルショウ「病院広報アワード2024・病院広報部門」で大賞を受賞。ハードとソフトの両面から時代を見据えた病院づくりを実践されておりこれからの病院づくりのヒントが満載です。

## 2.隈病院の誕生は92年前（隈病院の歴史）

1932

初代院長の隈鎮雄氏は、橋本病の発見者である橋本策博士が所属した九州大学医学部第一外科で学び甲状腺疾患専門病院の大分県 野口病院の副院長を務めた後、1932年神戸花隈の地に隈病院を開業。



隈鎮雄氏

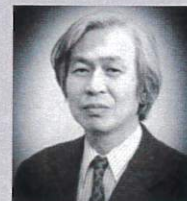


開業当時の隈病院

バセドウ氏病の手術を患者さんにわかりやすく紹介する小冊子を発行するなど「患者中心のよりよい医療を届ける」という理念はすでにこの頃から実践されていた。

1966

二代目院長に就任した次男の隈寛二氏は一般外科を廃止し、甲状腺専門病院へ転換。アイソトープ療法をいち早く導入するなど革新的な医療を次々に遂行、1981年個人病院からの脱却、オンリーワンの病院を目指し、医療法人神甲会を設立した。



隈寛二氏



**2001** 三代目院長に宮内昭氏就任。論文数、手術数、外来患者数ともに劇的に増加、革新的な医療が広く世間に認められ日本全国から患者さんがやってくる病院になった。



宮内昭氏

**2010** 初代院長の孫にあたる隈夏樹氏が理事長就任。野口塾長の病院経営塾にて経営を学ぶ。

夏樹氏はITの専門家だったゆえに院内の業務効率化や医療安全の視点から、それまであまり着手されていなかった病院業務のIT化を推進。待ち時間をより自由に過ごして欲しいとの観点から、患者一人ひとりが持ち歩いて、次の行き先をナビゲートする端末を導入した。



隈夏樹氏

また、院内カフェをつくり待ち時間に飲食できる仕組みを作ったり、患者さんの利便性のために必要な事を徹底的に考える経営を遂行した。こうして医療の現場と経営の両輪が力強く回りはじめ、「時代に即した機能とアメニティの病院へ」をコンセプトに2018年頃から本格的に病院改築計画が推進した。

### 3.設計計画

今回の増改築は隈病院にとって第四期診療棟建設工事であり、外来エリアを二倍に拡張するプロジェクトでした。同時にアイソトープ治療の専用病床の増築や病理診断科の拡張も計画。設計を担当した株式会社メドックスは、増築にあたり通常建物が拡大する事で光熱費も拡大する事を極力抑え、環境負荷を無くす事を目指してZEB（ネット・ゼロ・エネルギー・ビル）事業導入を提案、経産省が実施している令和3年度のZEB Oriented事業として採択されました。

病院運営を止めずに住宅地の中にある病院をいかに安全に増改築していくかという工夫も数々なされました。

### 4.インテリア計画（隈病院との出会い）

長い隈病院の歴史の中で、弊社が隈理事長と出会ったのは3年前のことです。それまで長く院内のインテリアを担当されていた外部デザイナーの中村氏の急逝により、メドックスの野口氏の勧めもあって、氏の後を継いで増改築棟のインテリアを遂行させるというミッションを得ました。開設者、隈鎮雄氏はどんな人物だったのか、2代目の隈寛二氏は、そして3代目の院長である宮内氏の考えや現理事長の隈夏樹氏の想いは……。私はこの病院の歴史を創った方々の想いを創造しながら未来へ向かうひとつの言葉（コンセプト）を探しました。



## 病院・高齢者施設の環境づくり

### ポイント① コンセプトメイキング

「医学はサイエンスに基づくアートである」。医学教育の基を築いたウィリアム・オスラー氏の言葉です。日野原重明氏もかつてその言葉を引用し「アートとしての医学は科学を患者にどう適用するかという技であり、患者とのコミュニケーションが大切」と述べています。

甲状腺の病に対して熱心に取り組まれ、今や世界的に著名になった隈病院は、まさに技術面だけでなく患者さんへの配慮やコミュニケーションが原点となっている病院であります。こうして増築棟のインテリアコンセプトを歴史・医療・アートの総合的な場として、「MUSEO（ムゼオ・イタリア語で美術館）」としました。以下、インテリアを構成する要素である「色彩計画」、「家具計画」、「アート」、「サイン計画」、「気分をつくるもの」についてご紹介したいと思います。

### ポイント② 色彩計画

コンセプトが決まるとインテリアの方向性は自然と定まります。

MUSEO（美術館）のコンセプトを具現化するために、大切にしたい事は①患者さんの邪魔にならず心地よさを感じてもらえるような色合い、②患者さんが正しく院内の目的の場所に行けるように色を使って導くことです。自然界の色を取り入れ、地下1階から地上8階までを海や岸边、杜、草原、宙・・・とグルーピングし色彩計画をしました。

地下1階～2階 → 海・水のグループ・・・癒される水辺、生命の源を表現

3階～5階 → 杜・土のグループ・・・緑の力といやし、穏やかな木漏れ日を表現

6階～8階 → 空・光のグループ・・・未来への光、世界に繋がる空・楽園を表現

誌面の関係で全フロアのご紹介はできませんが、例えば受付と待合の1階のテーマは「癒される水辺」。初めて訪れた患者さんが緊張せず安心して受付できる様にモスグリーンのタイルカーペットでお出迎え。自然と受付に向かえる様、方向性をタイルカーペットで貼り分け表現しました。音響設備も完備した多目的に使える宮内ホールの入口には宮内名誉院長の故郷である愛媛県の砥部焼、きよし窯の山田ひろみ先生が半年以上かけて描いた「光の扉」というタイトルの陶板が設置されました。大きな樹が果実をたわわに付けて枝を広げ、そこに一對の不死鳥。樹の幹にある扉の先には光に満ちた世界が広がっている・・・。

そんな物語の陶板が患者さんを励ましています。



講演会、コンサートも可能な宮内ホール



宮内ホール入口に  
愛媛県山田ひろみ氏の陶板「光の扉」



## 病院・高齢者施設の環境づくり

### ポイント③ 家具計画

MUSEO（美術館）のコンセプトに合わせると家具はどのようなのか。色、形だけでなく大切にしたのは患者さん同士が密にならないお一人様座りや、患者さんが自然に誘導されるような配置、目線などです。

その上で、①バランスが安定している事 ②座りやすさ、立ちやすさ ③掃除しやすさ ④空間としての美しさを考えながらセレクトしました。

各フロアのテーマに合わせて椅子の張地を変えるなど工夫しました。例えば待合室は同じ椅子に統一せずあえてデザインをバラバラに。



当初のインテリア計画3Dで表現

これは、患者さんに好きなマイチェアを見つけ頂き待ち時間を苦でなく楽なものにして欲しいという思いから。また既存の椅子も使い、増築棟と改修棟が明らかに差がでないように、椅子をシャッフル。新しさと歴史が交差して調和するようにしました。8階のスタッフ食堂脇の休憩コーナーはリゾートにあるような天吊りのラタンチェアを取り入れて遊び心を演出。短い休憩時間にこの椅子で休むスタッフも多く好評を得ています。



当初の増築棟待合家具プラン 3Dを作り検討を重ねた



特別室のある5階ラウンジ



特別室は五つ星ホテルのコンセプトで



スタッフに喜ばれている休憩室の天吊りチェア



### ポイント④ アート

隈病院は患者さんにリラックスして欲しいという思いから以前から院内にアートを多数掛けており、アート専用の保管室があるほどです。

今回のコンセプトに合わせると絵画はインテリアの一部になる抽象画が良いと判断しました。そこでオリジナルで20点ほど各階のテーマにあわせたキャンバスアートを作成しました。また創業者 隈鎮雄氏の妻、隈千代氏は素人のレベルを超越した絵画の才能があった方で、当時の作品の屏風が10点ほど保管されていました。それらを東京向島で三代続く片岡屏風店に持ち込み額装をし直してもらい、壁掛けアートとして蘇えらせました。

それらは放射線検査室の壁面に飾られ、患者さんの緊張を解き、隈病院の歴史と今を繋ぐ作品になりました。



オリジナルアートで演出した特別室



隈千代氏の屏風を  
アートに



マンモグラフィー室に  
掛けられた屏風アート

### ポイント⑤ サイン計画

院内が広くなりにつれてサインも増えるのではなく、あまり多くないサイン計画が大切だと考えました。なぜならサインを読むのも患者さんにとってはストレスになるからです。そこで以前から隈病院で広報関係を担当されている株式会社アドレッサンス浪漫堂さんに今回のMUSEOのコンセプトに合うサインの企画をお願いしました。アドレッサンス浪漫堂さんは、現状のサインを見直し必要でないもの、統一されていない用語も全て拾い出した上で新しい計画を作って下さいました。

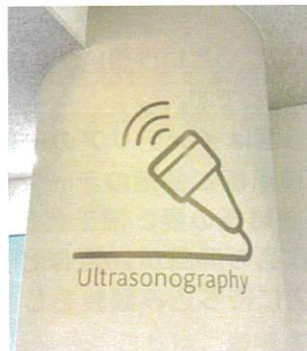
院内サインも空間の一部と考え、インテリアと調和するものとし、そっと寄り添い正しい方向へ無意識下へ導く「ナッジ」という概念を基本とし、オリジナルでデザインしたピクトグラム（絵文字）を用いて年齢、国籍に関わらず誰にとっても理解できる優しさのあるサインが出来ました。



## 病院・高齢者施設の環境づくり



初診受付サイン



エコーサイン



トイレサイン

### ポイント⑥ 気分をつくるもの

患者さんとのコミュニケーションは、言葉だけではありません。患者さんにストレスなく過ごして頂きたい想いをどう表現するか。

その手法としてデザインは効果的です。例えばガーデンもその一つ。やさしい陽の光や緑が患者さんの気持ちを癒してくれます。言葉が要らない病院からのメッセージです。

隈病院の新しい取り組みとして、宮内ホールの壁面に隈病院の歴史を展示、患者さんが病院の歴史を知る事ができます。

92年の歴史ある病院だからこその安心につながるものです。さらに宮内ホールでは講演会やコンサートなどのイベントも可能で患者さんのみならず広く医療従事者や地域の方の利用が可能となりました。それは次世代の病院の役割として大きな試みとなるでしょう。

さらに隈病院の特徴は「美しい清掃」にあります。以前から契約の清掃業者さんですが、トイレが汚いという情報が入ると、あっという間に駆けつけ清掃が行われます。どんなに最先端な病院になっても小さな当たり前を地道にこなす努力、それが患者さんから信頼感を得、来患者数増に繋がっていると思います。その基本的な姿勢が92年という歴史を培っているのだと思います。



成長し続けるガーデン



隈病院歴史コーナー

## 病院・高齢者施設の環境づくり

### 5. 隈病院のこれから（赤水先生の院長就任）

五洋建設株式会社が工事を担当し2024年増改築工事は完成しました。2022年に赤水尚史氏が4代目院長となり隈病院はさらなる成長をし続けています。

隈寛二院長が「絶対的なオンリーワンを目指す」と宣言されて30年。設計で取り入れたZEBの効果として、規模が大きくなったのに対して光熱費が上がっていないという結果も出ており環境にもやさしい病院が生まれました。



赤水尚史氏

さらにスタッフユニフォームも新しくなり、患者さんをお迎えする心構えを新たに冒頭に紹介した日本一の賞の受賞などプライドを持って働く舞台が完成しつつあります。増改築プロジェクトは隈病院にとってひとつの通過点に過ぎないかもしれません。

その先にある未来に向かって常に新しい医療の提供とオンリーワンの病院であり続けるために、労を惜しまず時代にあわせて柔軟に進化し続ける病院なのです。



増改築工事が完了した隈病院

※参考図書 「神戸から世界へ最高の医療を求めて 甲状腺専門病院の90年」  
著者 友野 伸一郎氏（発行所 株式会社大月書店）



戸倉 蓉子

#### 【プロフィール】

株式会社ドムデザイン 代表取締役  
慶応義塾大学病院にてナースとして勤務後、  
病院の環境を変えたいと建築デザイナーに転身  
看護師と一級建築士の資格を持つ建築デザイナー

#### 【著書】

医療の場を整える環境デザイン（日本看護協会出版）